

音声の研究
第22集（63年12月）別刷
THE STUDY OF SOUNDS
Vol. 22, DECEMBER 1988
TOKYO, JAPAN

モンゴル語における弱化母音の発達と閉音節化現象

栗 林 均

THE DEVELOPMENT OF REDUCED VOWELS
AND THE CHANGE OF
SYLLABIC STRUCTURE IN MONGOLIAN

Hitoshi KURIBAYASHI

1988

モンゴル語における弱化母音の発達と閉音節化現象

栗 林 均*

THE DEVELOPMENT OF REDUCED VOWELS AND THE CHANGE OF SYLLABIC STRUCTURE IN MONGOLIAN

Hitoshi KURIBAYASHI*

SUMMARY : One of the characteristics of such modern Mongolian languages as Khalkha, Chakhar, Buriat, Kalmuck, and Dagur is the frequent occurrence of reduced vowels, which have developed from the short vowels of non-initial (i. e. unstressed) syllables. In the above-stated languages the short vowels of non-initial syllables have been so reduced in quality that they have no longer the role of distinguishing the meaning of words. The disappearance of unstressed short vowels and the consequent re-formation of syllables are also characteristic of Khalkha, Chakhar, and Dagur, whereas the unstressed short vowels have been preserved comparatively well as the nucleus of original syllables in Ordos, Buriat, and Kalmuck.

The re-formation of syllables is characterized by the process in which the reduced vowels have ceased to be the nucleus of an open syllable and become stable only in a closed syllable. Thus in Mongolian (the Khalkha and Chakhar dialects) all the short vowels in the word-final position have vanished and a series of consonant clusters has come into existence in the syllable-final position, which was very rare in the earlier state of the language. Since all the non-initial syllables begin with one consonant in Mongolian, CVC and CVCC have become the most typical types of the

*東京外国語大学 (Tokyo University of Foreign Studies)

syllable the nucleus of which is an unstressed short vowel (C represents a consonant, V a vowel).

The disappearance of the reduced vowel of an open syllable and the re-formation of the syllable took place at the end of a word first. And after the completion of the last syllable of the word, the same kind of change — the disappearance of a reduced vowel in an open syllable and the re-formation of the syllable — proceeded to the preceding syllables one after another until the present configuration of the word has been completed.

1

現代のモンゴル系諸言語に共通して見られる主要な音声的特徴の一つに「弱化母音」の発達がある。たとえば、モンゴル人民共和国のハルハ・モンゴル語をはじめ、中国内蒙古自治区の内モンゴル語（チャハル方言等）、ソ連邦のブリヤート語、カイクムク語、中国東北地方のダグル語等の諸言語・諸方言では常に語の第1音節の母音に強勢（強さアクセント）が置かれ、強勢を持たない第2音節以降の母音——特に短母音——は、第1音節の母音と比較して著しく弱化した母音として現れる。

これらの言語では強勢を持つ第1音節の母音は明瞭に発音され、互いにはっきりと聞き分けられるのに対し、強勢を持たない第2音節以降の短母音は多かれ少なかれ調音が不明瞭で、音色があいまいである。また、第2音節以降の短母音は発話の速度によって音色が一定でなく、不安定なことで第1音節の母音と異なっている。このように弱化母音は、発音器官の弛緩と、中舌化による中性的な不明瞭な母音として特徴づけられ、それぞれの言語の第1音節に現れる「普通の母音」あるいは「明瞭な母音」と調音的、聴覚的に明確に区別される。

上述の現代のモンゴル系諸言語・諸方言の第2音節以降に現れる短母音に共通の重要な特質は、その音質がすでに意味を弁別する機能を持たないことである。換言すれば、上記言語において第2音節以降の短母音の音質は、他から独立して存在するものではなく、第1音節の母音と、部分的には隣接する子音の音質に完全に依存した、結合的な性質のものとなっている。弱化母音は、それ

ぞれの言語によってその弱化の程度や具体的な現れは異なるものの、その音質が第1音節の母音の種類によって決まり、したがって音質的に完全に予測が可能であるという点では共通している。⁽¹⁾

これに対して、弱化母音が語中に現れる位置は、それぞれの言語・方言ごとに様相が異なる。内モンゴルのオルドス方言、およびソ連邦のブリヤート語では伝統的な音節の型が比較的良好に保持されており、第2音節以降の短母音の位置はモンゴル文語に代表されるこの言語のより古い状態に近い。⁽²⁾ また、カルムイク語の第2音節以降の短母音はすべて質的に極めて著しい弱化を被り、シュワ [ə] に近い中舌母音として現れるが、語中におけるそれらの位置に関しては、むしろ保守的な傾向が強く、そこでも基本的には伝統的な音節の型が保持されているといえることができる。⁽³⁾

これらとは対照的に、モンゴル語（ハルハ方言、チャハル方言等）やダグル語では、語中・語末における弱化母音が一定の条件の下に消失したことにより、伝統的な音節の型——つまり、子音と母音の配置——が大巾に改変された。そこでは弱化母音はその音質において自立性を失ったのみならず、その現れる位置、すなわち存在自体も、子音の配置によって決定される他律的・依存的なものとなっている。

本稿では、モンゴル語における音節構造の改変を歴史的な観点から考察する。つまり、第2音節以降の短母音がいかなる条件の下に消失し、さらにその結果どのような変化を経て現代の音節構造が得られるに至ったか、その過程を明らかにしようとするものである。⁽⁴⁾

2

ベ・ヤ・ウラディーミルツォフは、大著『モンゴル文語とハルハ方言との比較文法』（1929）のなかで、モンゴル語の単語で語末の短母音が消失する現象（apocope）とならんで、子音に終る単語の語末に短母音が添加される現象（paragoge）の両方を同時に観察、記録している。

Apocope（語末音消失）の例：⁽⁵⁾

sara	「月」	>	sar ~ sară
üge	「語」	>	üg ~ ügə, etc.

Paragoge (語末音添加) の例：⁽⁶⁾

ed 「物」 > eddž ~ ed
 sil 「ガラス」 > šille ~ šil, etc.

語末音消失 (apocope) は、元々語末に母音をもっていた語が、語末に弱化母音をもつ発音と並んで、母音を失った発音も有するという指摘であり、語末音添加 (paragoge) はその逆に、元々子音で終わっていた語が、子音で終わる発音と並んで、語末に弱化母音を伴った発音も持つようになったという指摘である。

語末音消失と語末音添加という、一見全く正反対の二つの事実は、実はこの言語で子音終りの語と短母音終りの語との区別がなくなったという一つの現象の二つの側面にほかならない。これに関連して、服部四郎 (1951) はチャハル方言において /CVC/ と /CVCV/ (Cは子音音素, Vは母音音素) の区別が失われていることを指摘しており,⁽⁷⁾ またトモルツェレン (1968) もハルハ方言における同様な現象を指摘している。たとえば：⁽⁸⁾

モンゴル文語	オルドス方言	ハルハ方言・チャハル方言
eme 「女」	eme	} em ~ emě
em 「薬」	em	
ede 「これら」	ede	} ed ~ edě
ed 「物」	ed	

上の例では、かつて語末の母音の有無によって互いに区別されていたと考えられる蒙古文語形の eme 「女」と em 「薬」、ede 「これら」と ed 「物」等がモンゴル語 (ハルハ方言およびチャハル方言) では、同音異義語となっており、もはや語末の短母音の有無によって意味の区別はなされていない。

重要なことは、これがモンゴル語の一部の単語だけ、あるいは、/CVC/ と /CVCV/ の音節構造をもつ単語だけに限られたものではなく、全ての単語について当てはまる一般的な現象だということである。筆者はこのように、語末の位置において弱化母音が現れたり現れなかったりする現象を子音の発音様式の変種に還元できると考える。つまり、モンゴル語の子音には (ŋを除いて) 語末の位置で明瞭な出わたりを伴う変種と、それを伴わない変種があり、前者はポーズ (休止) の前にしばしば現れるが、両変種は互いに自由に交替する関係にある。語末の母音はこうした「出わたりを伴う変種」の付随物、換言すれば、それに先行する子音の調音が終わって発音器官の緊張が解放される際の

出わたりの一部とみなすことができる。したがって、歴史的にみた場合、語末の短母音が一様に消失した「語末母音消失」をこそ、モンゴル語に生じた規則的な音変化の一つとして認めるべきだと考える。

ロブサンワンダン⁽⁹⁾ (1964, 1967), ロブサンドルジ⁽¹⁰⁾ (1975) らはモンゴル語の発音表記として、子音終りの語と区別して一部の単語 (モンゴル文語で語末に母音を有する語) に対してのみ超弱化母音 (хэт огзом эгшиг, хэт богино эгшиг) を表記しているが、これは、子音終りの語と母音 (弱化母音) 終りの語とを区別しないという、この言語の現実と相容れないものに思われる。これに対して、リアランとジャムリ (1984) は、モンゴル語の語末の弱化母音がフランス語における [ə] のあらわれと類似していることを指摘して、フランス語の発音表記と同様、それらを発音記号で表記する必要性を認めていないが⁽¹¹⁾、これは語末の弱化母音が先行する子音に完全に依存したものであるとする考え方と相通ずるものである。

語末における弱化母音の消失は、内モンゴルのモンゴル語 (チャハル方言) においても、ハルハ方言と同様に、一般的な現象として観察される。そしてブリンテグス (布林特古斯) 編の『蒙語正音正字詞典』⁽¹²⁾ (1977) で採用されているような、語末の弱化母音を一切表記しない発音表記はこの事実を正しく反映していると考えられる。

モンゴル人民共和国で1940年代に採用されたロシア字に基づく「新文字」正書法は、書き言葉を話し言葉に近付けることをめざし、「発音どおりに綴る」ことを第1の課題としていた。この「新文字」正書法では原則として単語の末尾に短母音字を表記しない方式を採用しているが、これも口語における「語末弱化母音の消失」を反映したものである。⁽¹³⁾

しかし、この正書法においては、1音素1文字の原則が徹底していないこと、音韻以外の形態論的配慮に基づく綴りを混在させていること等との絡みでこの原則に少なからぬ例外を許しており、発音と表記の関係が必ずしも透明でない部分がある。

上の原則に対する主な例外は、次のようなものである：⁽¹⁴⁾

(1) ロシア字 н で語末の子音 [n] と [ŋ] を区別するために、н の後に短母音字を付して [n] を表す。例：

сана [san] 「考えろ」 cf. сан [saŋ] 「倉」

энэ [en] 「これ」 эн [eŋ] 「幅」
ууна [o:n] 「飲みます」 уун [o:ŋ] 「飲み、…」等。

- (2) ロシア字 r で語末の子音 [g] と [g̃] を区別するために、r の後に短母音字 a, o を付して [G] を表す。例：

бага [baG] 「小さい」 cf. бар [baŋ] 「チーム」
буга [boG] 「鹿」 буг [boŋ] 「悪霊」
арга [aräG] 「方法」 апар [aräg] 「背負い籠」等。

- (3) 形態論的配慮，特に動詞語幹であることを明確にするために語末に短母音字を書く。例（次の命令形は語幹形と同形）：

гэрлэ 「結婚しろ」
урва 「裏切れ」
хүргэ 「届けろ」等。

上の語はそれぞれ，

гэрэл 「光」
урав 「破いた」（< ур- 「破る」）
хүрэг 「達するがままにしておけ」（< хүр- 「達する」）

と同音であり，語末の母音字は発音を反映したものではない。

- (4) 「子音字 м н г л б в р の 7 文字はその前か後ろのいずれかに必ず母音字を伴わなければならない」という別の正書法規則の要求を満たすため：

домбо [domb] 「水差し」
өнгө [eŋg] 「色」
мянга [mæŋG] 「千」等。

- (5) 外来語の表記で：

колони [kolɔ:n] 「植民地」
Ази [a:dz] 「アジア」
Вена [we:n] 「ウイーン(地名)」等。

このように，新文字正書法で語末に書かれる短母音字は，純粹に音声的な短母音を表すためのものではなく，いずれも他の要因によって要求されている「わけあり」の母音字であり，これらの語は語末の短母音によって他の子音文字で終わる語と音声的，音韻的に区別されているわけではない。したがって，これらの語が「語末の短母音の消失」という一般的な現象の例外をなすもので

ないことは明らかである。

3

モンゴル語（ハルハ方言，チャハル方言）で語末の短母音が一様に消失した結果，それによって音節構造にも少なからぬ変化が生じた。

変化の第1は，モンゴル語では元来，音節末の子音結合は極めて稀であったにも拘らず，現代モンゴル語では，語末において多数の子音結合が形成されたことである。たとえば：

ende 「ここに」	→	end
talqa 「パン」	→	talx
engke 「平和な」	→	ejx
erdemtü 「学識ある」	→	erděmt
amjilta 「成功」	→	amdžält

ドブ（道布）は、『蒙古語簡誌』（1983）においてチャハル方言における音節末の子音結合に48通りの組み合わせがあることを示している。⁽¹⁵⁾ 次の表はリアランとジャムリ（1984）に基づき，それに若干の修正を加えてハルハ・モンゴル語において観察される音節末の子音結合をまとめたものである。⁽¹⁶⁾

		後 続 子 音											
		d	t	dz	dž	ts	tš	s	š	x	b	g	g
先 行 子 音	b	+	+			+	+	+	+	+			
	g	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	g	+	+			+	+	+	+				
	m	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+		
	n	+	+	+	+	+	+	+					
	ŋ								+	+	+	+	+
	l	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	r	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	j	+	+		+		+						
	s		+				+						
x		+				+							

音節改変の第2は、ウラディーミルツォフが metathesis (音位転換) としてまとめているものにあたる。これは、次のように語末の短母音とそれに先行する子音の位置が交替する現象として説明されている。例：⁽¹⁷⁾

モンゴル文語		ハルハ方言
arya	「方法」	arǎg ~ aryǎ
terge	「車」	terëg ~ tergë
kerbe	「もしも」	xerëb ~ xerbë 等。

この現象は、上に述べた音節末の子音結合の形成と同様、語末母音の消失という、一般的な音変化の結果生じた現象とみなすことができる。ただし、この場合は語末の子音連続が子音結合として保持されることなく、子音連続の間に新たに弱化母音が挿入された、特殊な場合である。

arya	→ *arG	→ arǎg
terge	→ *terg	→ terëg
kerbe	→ *xerb	→ xerëb

子音間に新たに弱化母音の挿入をもたらしたものは、消失した語末短母音に先行する子音の成音節的な性質によるものと考えられる。すなわち、語末の「子音+子音+短母音」という音連続で、消失した短母音に先行する子音が b g G m n l r j の場合に、子音間に弱化母音が挿入されている。(但し、mb ɲg ɲG は音声的に緊密に結び付いており、それらの間に弱化母音は挿入されない。上掲の表に見るように、それらは音節末の子音結合としてあらわれる。)

ちなみに、ハルハ・モンゴル語の子音 b g G は語中、語末では摩擦音化して [w] [ɣ] [β] として現れることが多く、この言語では上の8子音にㄱを加えた9子音が成音節的な素性をもつと見なすことができる。

モンゴルの新文字正書法における「母音持ち7子音」(м н г л б в р) と「非母音持ち9子音」(д т з ж ц ч с ш х) の区別が上の子音の分類とほぼ重なっている事は興味深い。新文字正書法の「7子音」と「9子音」の区別がどのようにして立てられたのか、その根拠は明らかでないが、これがモンゴル語の音節構造に関与する子音の役割の違いを反映したものであることは疑いない。

しかし新文字正書法では、上述のようにモンゴル語の成音節的子音のうち [n] と [ㄱ], [G] と [g] を子音文字で区別しないで、音声的実体のない「識別母音」でこれを区別したり、正書法規則を杓子定規にあてはめて、規則のた

めに実体のない母音字を書くことを要求したり(上掲の домбо, мөнгө, мянга 等)して、発音との関係が分かりにくくなっている事もまた事実である。

さらに、補助母音字 (я е ё ю) の使用も音節の構成を不明瞭にしている原因の一つとなっている。たとえば:

авъя	[awǎj]	「取ろう」
ирье	[irěj]	「来よう」
оёё	[ɔjǔj]	「縫おう」等。

4

「弱化母音の消失」は、実は、語末の位置に限って生じた変化ではなく、語中においても同様の現象を観察することができる。

ハルハ方言における語中の弱化母音の消失をウラディーミルツォフは、syncope (語中音消失)としてまとめている。例:⁽¹⁸⁾

モンゴル文語		ハルハ方言
emegen	「老婆」	emgëŋ ~ eməgëŋ
ĵibqulang	「壮大な」	dĵawxlǎŋ ~ dĵawxəlǎŋ
delekei	「世界」	delxī ~ deləxī
γomudal	「不平」	Gomdöl ~ Gomədöl
qoruqai	「虫」	xorxoë ~ xorəxoë 等。

これ以外にも、同様な例は多数存在する。

しかし、もちろん、語中のすべての弱化母音が消失したわけではない。語中の弱化母音は閉音節においては安定しており、その消失は開音節に特徴的な現象である。そして、語中における開音節の弱化母音の性質については、語末の弱化母音を検討した際の議論がそのままあてはまる。すなわち、語中の開音節の弱化母音も先行する子音の調音の緊張が解放される際に生じる出わたりの一部であり、独立の母音としての性質をもつものではないということである。開音節という観点からすれば、「語末の弱化母音の消失」とまったく軌を一にした現象をそこに認めることができる。

こうして、モンゴル語において「語末の弱化母音の消失」と同様、「語中開音節の弱化母音の消失」も、規則的な音変化とみなすことができる。語末の弱化

母音も開音節の母音であるから、語末と語中における弱化母音の消失は、「開音節の弱化母音の消失」という、より一般的な一つの変化として捉えることができる。

次に、「語中開音節の弱化母音の消失」によって惹き起こされた音節構造の変化を検討しよう。重大な変化の一つは、この言語の極めて多くの単語で形態論的な語幹の交替が生じるに至ったことである。すなわち、語幹に接尾辞がついた形で、もとの語幹形の中の短母音が消失する現象がそれである。

新文字正書法の「消去される母音」は、この現象を表記に反映させようとしたものに他ならない。そこでは、綴り字の規則として次のような場合に短母音字を消去することを規定している。⁽¹⁹⁾

- (1) 子音で終わっている単語に長母音で始まる接尾辞をつけるとき、語末の子音の前にある短母音は消去される。

амар + ыг → амрыг 「平安を」

аймаг + аас → аймгаас 「アイマクから」等。

- (2) 子音で終わっている単語に子音で始まる接尾辞をつける際に、その接尾辞の前に母音が挿入されるとき、語末の子音の前にある短母音は消去される。

арав + н → арван 「10」

бусад + д → бусдад 「他人に」等。

消去される母音の本質は、主格形語幹においては閉音節の音節主音として保持されている弱化母音が、接尾辞のついた語形ではそれが開音節に属しているために弱化・消失した現象である。つまり、「語中開音節の弱化母音の消失」の現象に他ならない。

主格形		接尾辞のついた形		
а-мар	:	а-ма-рыг	→	ам-рыг
ай-маг	:	ай-ма-гаас	→	айм-гаас
а-рав	:	а-ра-ван	→	ар-ван
бу-сад	:	бу-са-дад	→	бус-дад

上の例に見るように、母音で始まる接尾辞が語幹末の子音を先行する音節から「引き離す」のは、モンゴル語の音節構造の特質に起因している。すなわち、モンゴル語では母音始まりの音節は語頭以外には存在せず、第2音節以降の音節はすべて子音始まりだという特質である。換言すれば、第2音節以降の

母音（短母音，長母音，二重母音）は必ず，それに先行する子音と結合して音節を形成する。さらに，モンゴル語では音節頭に子音の連結は存在しないので，CV（子音+母音）は常に音節頭となり，音節の切れ目は常にCVの前にくることになる。

語末の弱化母音消失の際には，その結果として「音節末の子音結合の形成」や，「新たな弱化母音の挿入（成音節的子音の前で）」が観察されたが，「語中開音節の弱化母音の消失」に際しても，次のようにそれと全く平行的な現象を指摘することができる。

(1) 音節末における子音結合の形成

jibqulang 「壮大な」 → džawx-lǎŋ

maltamal 「鉱物」 → malt-mäl

ebderel 「破壊」 → ebd-rël 等。

(2) 新たな弱化母音の挿入（成音節的子音の前で）

surmayai 「熟練した」 → *surm-Gaě → su-rŭm-Gaě

jirmüsün 「妊娠した」 → *džirm-sěŋ → dži-rěm-sěŋ

ergimel 「螺旋状の」 → *erg-měl → e-rěg-měl 等。

5

現代モンゴル語における「語末短母音消失 (apocope)」，「語末短母音添加 (paragoge)」，「音位転換 (metathesis)」，「語中短母音消失 (syncope)」等，様々な現象が「開音節の弱化母音の消失」と，その結果生じた音節構造の改変というひとつの変化の異なった現れであることを見てきた。

「開音節の弱化母音の消失」も，音節構造の再編も，実は「弱化母音を含む音節の閉音節化」に向かう変化である。換言すれば，モンゴル語の弱化母音が開音節で一様に音節主音の機能を失い，閉音節の音節主音としてのみ安定するようになった一連の過程にはかならない。C を子音，ə を弱化母音とすれば，現代モンゴル語では Cə の型の音節が消えて，弱化母音は CəC もしくは CəCC という型の音節でのみ安定している。⁽²⁰⁾

音節の再編は，語末の音節から行われ，順次それに先行する音節へと進む。さきに，語末と語中における弱化母音の消失を一般化して「開音節の弱化母音

の消失」とみなしたが、変化の順序としては、「語末弱化母音の消失」は「語中開音節の弱化母音の消失」に先行する変化として位置づけなければならない。

語末の音節が再編され、確定した後、それに先行する語中の音節が語末の音節の場合と全く同じ過程で再編を受けることは前節の最後でみたとおりである。

音節の再編が語末の音節から行われることは、次のように開音節が連なった場合の変化を見ると明らかである。

batayana 「蠅」 → batGän

tusalaqu 「助ける」 → tuslũx

最後から二つ目の弱化母音だけが安定して保持されているのは、まず「語末弱化母音の消失」により語末の音節が閉音節となり (batayana → batäGän, tusalaqu → tusülũx), 次に「語中開音節の弱化母音消失」が生じたため (batäGän → batGän, tusülũx → tuslũx) と説明することができる。

こうして、子音と弱化母音の配列が一見錯綜しているように見える次のような場合——かつて存在していた第2音節以降の短母音が元の位置からすべて消失し、元来母音の存在しなかった位置に短母音が現れている——も、上で検討した一連の規則的な変化の組み合わせとして説明することができる。

orulya 「収入」 → orlög

turšilya 「実験」 → turšlũg

ここでは

- (1) 「語末弱化母音の消失」と、
- (2) それに伴う「弱化母音挿入」によって語末の音節が閉音節に再編され、次に
- (3) 「語中開音節の弱化母音消失」が生じた、と考えられる。

	(1)		(2)		(3)
orulya 「収入」	→	*orölg	→	orölög	→ orlög
turšilya 「実験」	→	*turšülg	→	turšülög	→ turšlũg

上で検討した、「開音節における弱化母音の消失」が音節構造の改編の主要なタイプであるが、ここに、「閉音節の弱化母音消失」とみなし得る場合があることも指摘しておかなければならない。それは、CV CV という音の連続で、両方の母音がともに消失してしまう (CV CV → CC) 場合である。

この変化は、次のような条件の下で観測される：すなわちそこに現れる2つの子音のうち、一方の先行する子音が成音節的な子音 b g g m n l r j のい

れかであり、さらに後続する子音が t ts tš dz dž のいずれかである場合である。例：

bögeji 「指輪」	→	bögdž
irejü 「来て」	→	irdž
beyetü 「身体をもつ」	→	bijt
gereči 「証拠」	→	gertš 等。

また、先行する子音が s, x のいずれかで、さらに後続の子音が t, tš のいずれかの場合にも、両方の母音の消失がみられる。例：

usutu 「水のある」	→	ust
meketü 「ずるい」	→	mext
jiyasuci 「漁師」	→	dzačästš 等。

上に述べた条件はハルハ方言（中部）とチャハル方言に共通であるが、チャハル方言ではさらに後続の子音が d, s, š, x の場合にも、この変化が生じている。この場合、ハルハ方言では語末の弱化母音が消失するだけであり、この点で両方言は一致しない。例：

モンゴル文語	ハルハ方言 ⁽²¹⁾	チャハル方言
ömüdü 「ズボン」	ömöd	ömd
elesü 「砂」	elès	els
bulasi 「墳墓」	bulüş	bulš
erüke 「世帯」	öröx	örx

これは、次のように元来子音 d, s で終わる語についても同様である。

モンゴル文語	ハルハ方言	チャハル方言
arad 「人民」	aräd	ard
kebis 「絨毯」	xibis	xibs
ulus 「国」	ulüs	uls

後者のチャハル方言の例は、紛れもなく閉音節の弱化母音の消失である (CVC → CC) から、上に見た CVCV → CC の変化においても、二つの母音が同時に消去したのでなく、まず語末の母音が消失したあと、上のような特殊な条件の下で閉音節の弱化母音が消失した (CVCV → CVC → CC) とみなすべきであろう。⁽²²⁾

註

- (1) この点で、A. モスタールトの記述したオルドス方言は唯一の例外である。この方言は、第2音節以降の短母音が独自の音質を持つことで、現代モンゴル諸語の中で特異な位置を占める。これについては拙稿「蒙古語諸方言におけるウムラウト現象」(『音声の研究』第21集、1985)の91-93頁を参照。
- (2) 本稿ではモンゴル文語、オルドス方言等に反映されていると考えられるモンゴル語の音節構造のより古い状態を、モンゴル文語形をもって代表させる。
- (3) カルムイク語における語中の弱化母音の位置は、
Б. Д. Муниев (ред.) 《Калмыцко-русский словарь》 Москва, 1977. の発音表記による。また、J. C. Street, "Kalmyk shwa" *American Studies in Altaic Linguistics*, The Hague, 1962, pp.263-291. を参照。
- (4) ハルハ方言における弱化母音の音質とその表記の問題については、すでに拙稿「現代モンゴル語における「唇の母音調和」について」(『一橋研究』第6巻第2号、1981、98-112頁)で論じた。
- (5) Б. Я. Владимирцов 《Сравнительная грамматика монгольского письменного языка и халхаского наречия. Введение и фонетика》 Ленинград, 1929, pp. 331-334.
- (6) 同上, pp. 342-344.
- (7) 服部四郎「蒙古語チャハル方言の音韻体系」『言語研究』19・20号、1951、83頁。
- (8) Ж. Төмөрцэрэн, "Монгол хэлний үе эс бүтээх эгшгийн учир" 《ШУА-ийн Мэдээ》, 1968, No. 1, p. 62.
- (9) Ш. Лувсанвандан, "Монгол хэлний халх аялгууны балархай эгшгийн тухай асуудалд" 《ШУА-ийн Мэдээ》, 1964, No. 2, 88-101.
および Ш. Лувсанвандан 《Орчин цагийн монгол хэлний зүй. Монгол хэлний авианы бүтэц. Тэргүүн дэвтэр》 УБ, 1967.
- (10) Ж. Лувсандорж 《Монгол авианы дуудлага》 УБ, 1975.
- (11) A. Riialand, R. Djamouri, "Harmonie vocalique, consonantique et structures de dépendance dans le mot en mongol khalkha" *Bulletin de la Société de linguistique de Paris*, Tome LXXIX-1984, Fascicule 1, p. 337.
- (12) 布林特古斯編『蒙語正音正字詞典』呼和浩特, 1977.

- (13) Дамдин-Сурэн, “О принципах новой монгольской орфографии”
《Краткие сообщения Института востоковедения》1952. II, pp. 31—37.
- (14) Ц. Дамдинсүрэн, “Шинэ үсгийн дүрмийн тухай ерөнхий зүйл”
《Монгол хэл бичгийн зарим асуудал》УБ, 1959. および Ж. Надмид,
Б. Жанчивдорж, Б. Рагчаа 《Монгол хэлний зүй, Авиа зүй, зөв
бичих дүрэм》УБ, 1971. (栗林均訳『モンゴル語の音声と正書法』東京, 1983)
- (15) 道布『蒙古語簡誌』北京, 1983, 11—14頁。
- (16) 註(11)のp. 340. リアラン, ジャムリとの主な違いは, 先行子音に G ᠭ j を加え,
後続子音に x b g G を加えたことである。
- (17) 註(5)の pp. 336—340.
- (18) 註(5)の pp. 334—336.
- (19) Ж. Надмид, Б. Жанчивдорж, Б. Рагчаа 《Монгол хэлний зүй, Авиа
зүй, зөв бичих дүрэм》УБ, 1971, p. 26, §20.
- (20) チャハル方言では, 語中の短母音が開音節の音節主音として機能している例が若干
観察される。例(かっこ内はモンゴル文語形) : emnĕlēg (emnelge) 「病院」,
örgödzix (örgejikü) 「広げる」, amgäläᠭ (amuᠭulang) 「平安」, ardtšiläl (aradčilal)
「民主化」等。
- (21) 註(10)に同じ。
- (22) 最後の二つの場合, 新文字正書法では弱化母音を表記せず, それぞれ
өмд 「ズボン」, элс 「砂」, булш 「墳墓」, өрх 「世帯」;
ард 「人民」, хивс 「絨毯」, улс 「国」
のように書くが, これは新文字正書法の製作者ダムディンスレン(Ц. Даминсүрэн)
の方言——ハルハ方言の東部下位方言——の特徴を反映したものと考えられる。

補： 本稿は, 1987年9月にモンゴル人民共和国の首都ウランバートルで開催された
「第5回国際モンゴル学会議」の言語・文学部会で発表した“*How the reduced
vowels have influenced the syllabic structure of Mongolian*”と題する発表をもと
に, 加筆, 訂正を加えてまとめなおしたものである。

また, 1988年2月には, 日本に滞在中の内蒙古大学蒙古語文研究所所長の确精扎
布(チョイジンジャブ)教授に草稿を閲読していただき, 多くの貴重な御意見を賜
わった。同教授に厚く御礼申し上げる。